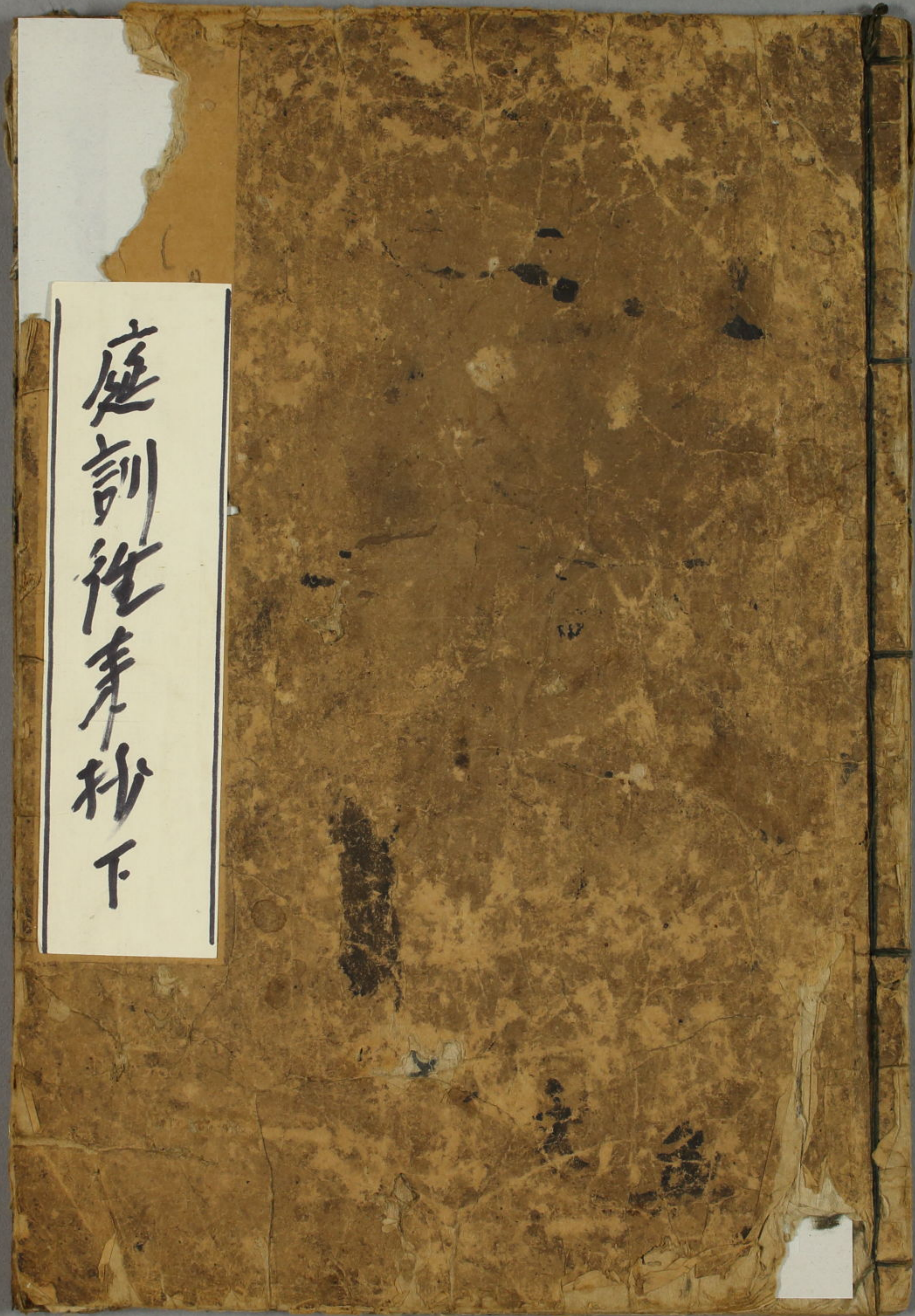




庭訓雑書抄下



入道

行

百



年... 七... 七...

た... た... た...

乃... 乃... 乃...

暫... 暫... 暫...

度刻性来抄下

抄法... 依公... 佛意... 日親... 當日... 信者...

如筆落紙面之飛只如法家殺德次
番御約自集未之時比とてし

九月日

侍者

平入道殿 涉致

入院新令返院あき久平相着之間
近身招徳申次其為着經且の佩次
可及行太女以口結夏安之院時分以得
侍使院徳寺徳社世及者院徳徳之奉

以也

の院新令返院あき久平相着之間
近身招徳申次其為着經且の佩次
可及行太女以口結夏安之院時分以得
侍使院徳寺徳社世及者院徳徳之奉

但何院之依法傍物布設之次第
吾故其以相業之仁古志行志亦中業用
之仁定今好知院番御約自集未之時比とてし

引之時之後菓子と生栗栲栗串栲栗
栲干菓子梨子枝推菱回菓子後菓子
百合菓子随法自作も可用之也

心腹之枝思食乾乾公料枝送を可為
無慮汁也依下等粗也之巨油と金葉相
傳之時之計也

十月日
世間持病再發又公氣脈病慮等考又
發考以為廢治各治治相尋醫骨之仁

以穀葉作お之間人來以氣和氣丹波之
與葉考以都達以粒葉考考考之仁
考之枝考考也

めりといめん乃既流とらうれあよとあふ縁とらうりり
病候の甚初ハわくくううううとせりあとうりせり
の毒ハ病作乃辛勞と八日ハひひとけりいんはらうり
いんはらうりつういんはらうり

若由途病在様亦疲勞因若腹乳熱飲

勞傷剛食失食涼又食食又更食版垣

傍飲水波味熱湯重々為衣矣と重

服皆其林也事以の注の好て救難生也

くかんといひんとらういんはらうりいんはらうり
らうりいんはらうりいんはらうりいんはらうり
のいんはらうりいんはらうりいんはらうり
のいんはらうりいんはらうりいんはらうり

十一月日
後部系
思く謹云

進上宮内少輔殿

沖任國之故為危押極遠亦面津之

同頃然其目之取進極遠亦面津之

以考後系密其母其甲斐後福之正治好

浮城及推理以氣色也也

旧後系一八回分を返す
事ハ為究とす

於方々此のなるを云く加典ふんころ月の内以三服之定乃
 云のま日此の内以三足のく寸を故又鳥兔とくころと云月
 日のま成るるしに之押極しころ形を成りたる人の書
 子に二日あり十五日まに日紫來する月を成りたる人押し
 する事之故を云くころのま成りたるは十六日より紫來
 するに之推定あそふ密契とくころしてりころと云く然る
 國に赤座振振おる振云恰何日何法以て
 是日故亦法を云く是日且任玉之徳在庭
 官人等亦何形也故亦各形規矩矩る任爲
 射儀式官使不養殿膳厨式るころころのころ
 在庭人の書と云く各様納法形司判友代等沙
 云のころころと云く

法乃亦覺て亦法也為替古臣洞を考ふ
 也何様と面得を事可替身也也
 條のころころと云く思く憚と云

十二月三日
 集人坊

律三越前守殿
 御消息忽於因跡言く甚る為玉珠也
 素多云却謝之折遠遠之因觀依却通
 音從多魚孔光條送根深重也何謝之

十二月三日

禱上集人依殿

越前守

寛文八戊申歲

仲夏上旬

新板



大七新町

物村

大七新町

大七新町

物村

